坂崎重盛＋
荒井敏由紀＝編著

恋愛の技術

名作文学からまな
恋のケース・スタデ

恋愛の技術

坂崎重盛＋荒井敏由紀＝編著

恋愛の技術

――名作文学からまなぶ恋のケース・スタディ

第一版第一刷発行　一九九二年一月二十二日

編著者――坂崎重盛＋荒井敏由紀
発行者――中西吉永
発行所――株式会社 芸文社
〒101 東京都千代田区神田駿河台三ノ五
電話―編集〇三(三二九五)〇八一四
販売〇三(三二九二)〇一二一
編集担当―校條 真
印刷所――ベーテルフォト印刷株式会社
製本所――大口製本印刷株式会社
落丁、乱丁はお取り替えいたします。
Printed in Japan ISBN4-87465-211-5

まえがき

荒井敏由紀

まだ少年の頃、近くの公園の芝生の上に寝ころんで、流れて行く雲を眺めながら、自分もこのような恋をしたいものだ、と名作の中の恋愛に憧れたものである。そして、現実の女性たちと出会うようになり、その後、私自身がどのような恋愛をしてきたのか……などと、つくづくとそんな少年の日のことを振り返ったりしてしまった。

今回この本を編集して、本当に様々な恋愛があるものだと再認識した。そして、名作といわれる作品の恋愛は、尋常なものではない。それこそ「恋という病」といわれるに値しているようだ。恋愛こそ、まさに人類究極の病なのではないか。

時に美しい花を咲かせはするが、それにともなう苦痛があまりにも大きいような気もする。それでも、その辛さ、哀しみさえも帳消しにし、さらに余りある喜びを与えるのが、恋愛だといえるのかもしれない。だからこそ、人はその美しさに憧れ、恋愛を夢見る。

人として生まれてきて、男女の愛を知らないことはとても哀しいことだ。だが、それを知ったからといって幸福になれるとはかぎらない。そうであっても一度でも恋の味を知った者は、

その後の人生がどんなにつまらないものに思われても、どこかで救われるのかもしれない。

現代では、男女の関係においても、マニュアルや小手先の技術だけが先行しているらしい。そんな情報に振り回されている人もいるかもしれないが、本書を読んでいただけば、それは恋愛の模倣にすぎないように思えてくるのではないだろうか。どうせ恋という病に陥るならば、とことん陥ってみるのもいいのではないか。

本書は『恋愛の技術』と銘打っているが、それは小手先のテクニックではなく、心の技術といえるものである。もちろん、それが技術と呼べるかどうかには異論があるかもしれないが、それぞれの人の心の在り方の中に、恋愛に対する姿勢がすでに内包されている。

と、まあ前置きをこれ以上並べるよりも、各執筆者の紹介する恋愛の世界にどっぷりと浸ってみてほしい。そして本書をひもとくことによって、みなさんが自らの恋愛をさらに深く味わい尽くすきっかけとなれば幸いである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

恋愛の技術

もくじ

第1章 男と女が出会うとき

出会いは突然やってくる――レマルク『凱旋門』 13
格子窓を隔てた出会い――森鷗外『雁』 15
はじめて会った瞬間にひきつけられる――立原正秋『他人の自由』 18
舞踏会での運命的な出会い――バルザック『谷間の百合』 20
流れる時間の中で出会いを繰り返す――片岡義男『メイン・テーマ』 23
女神のような女性との出会い――ヘルダーリン『ヒュペーリオン』 26
出会うべくして出会った二人――谷川俊太郎『女に』 28
人間性を取り戻すきっかけ――吉行淳之介『鳥獣虫魚』 31
身近な愛に気づくとき――モンゴメリー『アンの愛情』 34
ささやかな日常の中の神秘――村上春樹『羊をめぐる冒険』 36
決して結ばれることのない出会い――辻邦生『北の岬』 39
幸福の青い鳥は自分の身近にいた――モーム『人間の絆』 42
第1章の終わりに――人は、なぜ人と出会い、どう出会うのか 45

第2章 片思いの世界

閉ざされた愛の形――村上春樹『ノルウェイの森』 51
思われることを拒絶する女――堀辰雄『菜穂子』 54
告白されないまま残った思い――ヘッセ『郷愁』 57
あこがれの口づけ――ワイルド『サロメ』 60
野生の動物は檻に入れられない――カポーティ『ティファニーで朝食を』 62
つかのまの片思い――スタインベック『菊』 65
愛した人の面影を追いかけて――田宮虎彦『酒場ルルチモで』 68
性的不能な男の屈折した恋心――ヘミングウェイ『日はまた昇る』 71
会いもしない相手への片思い――ハーディ『幻想を追う女』 74
第2章の終わりに――恋は片思いに始まり、片思いに終わる 77

第3章 愛を告白するとき

誇り高き侯爵令嬢の告白――スタンダール『赤と黒』 83
素直な情熱に陥落するとき――ペータース『ルー・サロメ 愛と生涯』 87
彼との別れと新たな愛――村上春樹『ノルウェイの森』 90
カツ丼の出前にきたの――吉本ばなな『満月』 93
思わずも口から洩れる愛の告白――ムージル『愛の完成』 97
たった一つの嘘が愛の表現――池澤夏樹『マリコ／マリキータ』 99
告白は愛の決意表明――和田芳恵『雪女』 102
必要とされたときに自覚する愛――C・ブロンテ『ジェーン・エア』 104
第3章の終わりに――愛を、いつ告白するか、どう告白するか 108

第4章 恋には障害がつきもの

純粋ゆえに結ばれなかった愛――船山馨『石狩平野』 113
一つの恋がもう一つの恋の障害になる――ゴールズワージー『林檎の樹』 116
時代と状況が恋をさらに輝かせた――レマルク『凱旋門』 118
恋愛という巨大迷路――大岡昇平『武蔵野夫人』 125
血のつながらない姉弟の愛――吉本ばなな『哀しい予感』 127
障害を乗り越えて得た一夜の幸福――マン『幸福への意志』 129
禁を犯して高まる感情――三島由紀夫『春の雪』 131
第4章の終わりに――恋の障害あってこそドラマが生まれる 137

第5章 燃え上がる恋

愛人の娘への絶望的な恋――モーパッサン『死のごとく強し』 143
恋のみに生きる女――アベ・プレヴォ『マノン・レスコー』 146
ニヒリズムが情熱に結びつくとき――宇野千代『色ざんげ』 149
裸と裸の愛――三浦哲郎『忍ぶ川』 151
遅すぎた愛の目覚めと不屈の情熱――ミッチェル『風と共に去りぬ』 154
自然の性の交わりに結ばれた二人――ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』
お互いを許し合う関係――室生犀星『かげろふの日記遺文』 160
骨まで愛する恋――小川国夫『助骨』 162
第5章の終わりに――恋は病か狂気の沙汰か 165

第6章 戯れの恋――誘惑の技術

色魔のテクニック――モーパッサン『ベラミ』 171
恋の袋小路に誘う年上女の誘惑――伊藤整『青春』 177
一度かぎりの戯れの恋――田辺聖子『恋の棺』 179
純な少年と技巧的な少女との恋――ヘッセ『車輪の下』 182
宝石のために一夜の恋に賭ける女心――森瑤子『ホテル・ストーリー』 185
悪女が凡夫を誘惑するときの技術――ラクロ『危険な関係』 187
性の深淵への誘い――ケッセル『昼顔』 189
自分が愛し苦しめた男に殺された女――樋口一葉『にごりえ』 192
第6章の終わりに――恋の甘い力学、そして引力 196

第7章 嫉妬に狂うとき

嫉妬はそもそも人の心に巣食っている？ ――シェイクスピア『オセロー』 201
優雅な貴婦人の胸に秘められた嫉妬の炎 ――田辺聖子『新源氏物語』 203
近親に潜む愛と嫉妬 ――芝木好子『貝紫幻想』 206
失われた若さに対する嫉妬 ――モーパッサン『死のごとく強し』 208
誤解から生じた嫉妬 ――ラ・ファイエット夫人『クレーヴの奥方』 211
愛なき夫婦に起こった嫉妬の惨劇 ――トルストイ『クロイツェル・ソナタ』 214
嫉妬の発作 ――志賀直哉『暗夜行路』 217
女の誇りが男を遠去ける ――室生犀星『かげろふの日記遺文』 220
父と子に同時に愛された女 ――ツルゲーネフ『初恋』 223
究極の三角関係 ――武田泰淳『才子佳人』 227
第7章の終わりに ――恋心とともに生ずるデーモン 230

第8章 不倫なる関係だからさらに燃える

死に至る病の恋 ――三浦哲郎『愛しい女』 235
非日常だから純粋な愛を求める ――福永武彦『海市』 238
二人の男の間で揺れ動く恋心 ――ドストエフスキー『白痴』 241
世間の常識を越えた激情 ――アナイス・ニン『ヘンリーＲジューン』 245
二人の農業青年を覆う光と闇 ――立松和平『遠雷』 247
一時の過ちに身を任せるとき ――トルストイ『戦争と平和』 249
青い鳥を求めた末の不倫 ――フローベール『ボヴァリー夫人』 253
第8章の終わりに ――不倫もまた人の生きる証か 256

第9章 恋心から醒めるとき

同情が愛の熱情を錯覚させるとき——コンスタン『アドルフ』 261
恋を欲していたがゆえの錯覚——山田詠美『BAD MAMA JAMA』 264
盲目の少女に光が宿ったとき見たもの——ジッド『田園交響楽』 267
ひかれたのは美しくないからだった——向田邦子『だらだら坂』 269
別れにきた女——チェーホフ『退屈な話』 272
愛の言葉で恋から醒めたことを知る——林真理子『身も心も』 275
時がたち醒め果てた恋——三島由紀夫『天人五衰』 277
恋が終わったとき人は何かが変わる——サガン『ある微笑』 279
第9章の終わりに——朝の来ない夜がないように…… 283

第10章 別れは美しく

別れは最後のコミュニケーション——山田詠美『トラッシュ』 289
美しい思い出の別れ——ベルイマン『ベルイマン自伝』 292
運命の糸に操られた別れ——パステルナーク『ドクトル・ジバゴ』 295
あざむきが別れを誘う——マラマッド『湖上の貴婦人』 298
旅の終わりと愛の幕引き——宮本輝『ドナウの旅人』 300
一夜の出会いと別れ——島尾敏雄『単独旅行者』 303
年上としての女の分別に隠された切なさ——田辺聖子『新源氏物語』 304
心が通じ合ったときに、本当の別れがやってきた——宮本輝『錦繡』 307
別れは一つの「空席」——俵万智『もうひとつの恋』 310
第10章の終わりに——恋のエンドマークをどう映すか 312

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

第11章 死が愛の終わりを告げるとき

死の予感が二人の愛をかけがえのないものにする——堀辰雄『風立ちぬ』 317
引き裂かれた恋の悲歌——伊藤左千夫『野菊の墓』 320
今一度、あの顔に——円地文子『なまみこ物語』 322
生霊となった女の執念——紫式部原作、谷崎潤一郎訳『潤一郎訳源氏物語』 326
埋もれた天才画家を支えた愛——モーム『月と六ペンス』 328
愛の結晶の極致——スタンダール『赤と黒』 332
幸福な日々に不安が——サローヤン『ディア・ベイビー』 334
恋人にピストルを——ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』 337
死に臨む瞬間に思い起こした愛しい人——瀬戸内晴美『遠い声』 340
第11章の終わりに——生と愛のパラドックスとしての死 344

第12章 失った恋を引きずる

若き日の恋の回想に生きる——シュトルム『みずうみ』 349
自尊心を満たすための愛——フィッツジェラルド『金持の御曹子』 351
恋人を追いかけた果てに——田宮虎彦『銀心中』 354
はじめての、そして一生の恋——デュラス『愛人 ラマン』 359
死によって清算する恋情——芥川龍之介『袈裟と盛遠』 361
あきらめずに夫の愛を取り戻す——テネシー・ウィリアムズ『やけたトタン屋根の上の猫』 363
ふるさとに恋の幻影を求めて——坂口安吾『ふるさとに寄する讃歌』 366
愛の十字架——ディキンソン『夏の盛りにその日がやってきた』 368
夢はそのさきにはもうゆかない——立原道造『萱草に寄す』 371
第12章の終わりに——恋のゆくえは…… 374

あとがき 377

第1章

男と女が出会うとき

出会いは突然やってくる——レマルク『凱旋門』

劇的な恋愛では、しばしば最初の出会いから、恋の予感がある。だが、最初はまったく好意すら持たない相手に引きつけられることも、時にはあるようだ。

女は、斜いに、ラヴィックの方へ近づいてきた。早足にあるいていたが、妙なふうによろめいていた。ラヴィックは、女がすぐそばまでやってきたとき、はじめて女に気づいた。見ると、頬骨の高い、眼と眼の間のひろい、蒼ざめた顔をしていた。その顔は硬ばって、まるでマスクでもかむったようで、げっそりこけているように見えた。彼は女の眼が街燈の光をうけて、ガラスみたいにひどく虚ろな表情をしているのに気づいた。

女は体が触れるほどすれすれに、彼のわきを通りぬけた。ラヴィックは片手をのばして、女の腕をつかもうとした。とたんに、女はよろよろとよろめいた。もし彼がつかまえてやらなかったら、倒れてしまったろう。

彼は、女の腕をしっかりつかまえた。「どこへ行くんです?」ちょっとしてから、彼はた

ずねた。
女は大きく眼をみひらいて、じっと彼を見つめた。「放してください！」女はささやくように言った。
（中略）
彼は女を見た。いったいおれはなんだってこの女を引きとめたりなんかしたんだろう？この女はどうかしている。それは明らかだ。しかし、それがおれにどうだっていうんだ？どうかしている女なんか、いままでいくらでも見ている。ことに夜、パリの街においておやだ。そんなことはいまはどうだっていい。ただ望むらくは、二三時間の睡眠をとることだ。（レマルク、山西英一訳『凱旋門』新潮文庫）

これはレマルクの『凱旋門』の冒頭、ラヴィックとジョアンの出会い場面である。『凱旋門』という小説は、イングリッド・バーグマン主演でかつて映画化されているので、リバイバルあるいはビデオなどで見た人も多いかもしれない。第二次大戦前夜のパリを舞台にして、ナチス統治下のドイツから亡命してきたラヴィックとジョアンの恋愛を軸に、かつて恋人をナチスの拷問で失ったラヴィックの復讐劇がスリリングに展開される。
ラヴィックは腕のいい外科医であるが、不法滞在者であるために、つねに取り締まりを警戒

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb